海せ寄外地

編集後記・その2

いまの釜ケ崎の気持に通じるような
昔の詩を読んでみよう

○採炭夫の歌
○おれら
○コップ酒屋にいる男の群

この前、ちいさな別冊付録で「うた」というのをつけたとき、本誌の方でも特集「うた」をやった。それは要するに歌謡曲など、メロディがついていて、声を出してうたう歌についてのことだった。

こんどは読むうた、詩について少し紹介してみる。もちろん、読むときに声を出して読んで、調子がよかったら自分の勝手なフシでうたってもかまわない。

紹介するのは古い詩だけれど、いま釜ケ崎で生きている者の心にかようところが、きっとあると思う。

採炭夫の歌　後藤　謙太郎

底だ　底　底　どん底だ
この世の底だ　どん底だ
もしも堤防が崩れたなら
瓦斯が爆発したならば
水攻め　火攻め　その上に
天井がバレたら生き埋めだ
底の底なるどん底に
この世の底のどん底に
俺は炭掘る採炭夫
飽食暖衣のブルジョアの
××××が見憎けりゃ
腕にゃ覚えたツルがある
汚れた世界の果てまでも
赤い××で染めてやる

この作者後藤謙太郎は大正十五年に「労働・放浪・監獄より」という詩集を出しているが、実際の生活も詩集の題そのままで不幸な死に方をした。

おれら　岡本　潤

おれら　ゴロツキといわれ　ヌスビト
といわれ　コツジキといわれ　ヒト
デナシといわれ　ムチムノウといわ
れ　コウガンムチといわれ　クズと
いわれ　カスといわれ　ヒトゴロシ
といわれ　コクゾクといわれ
つまはじきされ
おったてられ
しばりあげられ
つるされ
ひっぱたかれ
けられ
ふみにじられ
されど　おれら
悔なし
怖るるなし
天下に恥ずるなし
地平線はきわまりなし
輝く天日にむかい
高らかに歌い
朗らかに呼ばわり
ブラボオを叫び
手を組み
肩を並べ
足踏み鳴らし

吾等が大道を歩まん

作者岡本潤はいま七四歳で病床にいる。名を知られた詩人だが、若いとき東京でツル、スコを持って仕事をしたこともある。その頃の「土工の詩」というのもいつか紹介したい。

コップ酒屋にいる男の群　伊藤和

町に行きコップ酒屋のノレンをくぐる
安い酒を一杯　注文する
土間をあらいざらい電灯が照している
萎びた瓜漬を噛んでは牛のように舌を
　出し醤油のジャミた唇を舐め
百姓の仲間がいる　土方の仲間がいる
　馬車挽の仲間がいる

おいらはみんな安い酒一杯や二杯では
　酔わない唇を舐めずる
なにしろ腹の虫がおさまらない
もう一杯から　二杯となり五杯六杯と
　重ね酔ってくる
コップ酒屋にいる男の群！

おいらをヤクザ者と告げるお定りのり、
　んしょく共はここにはいない
あいつ等はたぶん貯金をする話をし政
府をほめながらあいつ等の家にいる
何も持たないヤクザ者には困るとあい
つ等が云うそしておいらはコップ酒
屋の腰掛にいる

そうだここにおいらが酔っている
馬のように達者で　いくらでも呑みた
い唇を舐めずり空になるコップを冷
笑し
また腕と腕が唸りミケンから血を流す
そんな喧嘩もやり
おいらの眼はあいつ等が震えるほど坐
っている

全く　それならば何が喧嘩をさせるの
かなんて理窟はヤボなことだ
喧嘩でも何でもやるときにはやる
胸がむかつく　コップ酒
コップ酒屋に来て見て驚く奴には毒だ
おいらが酔っている
で、結局　血を拭ってまた呑み直しお
いらは大いに笑う。

作者伊藤和は十年あまり前死んだ。この詩は戦争前のもので、作者は百姓仕事をしながら詩を書いていた。おだやかでない詩を書いたというので刑務所へも行かされた。

こんな紹介は機会があればまたやりたいと思っている。感想を送って下さい。

（T）

労務者渡世　五月号
（通巻第六号）
一九七五年五月八日発行
（毎月八日発行）
定価・一〇〇円
（送料五五円）
＜編集発行＞
「労務者渡世」編集委員会
＜編集発行人＞　中原哲也
＜連絡先＞
（郵便番号五五七―九一）
西成郵便局私書箱第三一号
郵便振替口座・大阪二七八三五